古今奇談

繁野話

壹

へ13
3138
1

へ13
3138
巻5

門 へ13
号 3138
巻 1

昭和九
九月十二日

近頃の者三十年前。國字小説數十種を戯作して茶話の代也。千里流子を伴ひて。美者紙九種を搨て書林に授くるは。世まだ早かりぬ。其このもくさり者ありて。花月あるべし。市小路生。山下樵夫。ト樵夫を賣り。字義蓄き。書籍を遠ふる者多し。去年玄海浪華に遊る。書林亭に縁て俳諧を教むり。其主人にて俳諧ふ其事あり。今年の秋。張三郎と。洲にて遊家を寄る。宮の釣の中より。冊子をとり出て。魚を掛ひ聴へん

として。その様甚を恐れ。同読を恥て。沈思する
所のものもそれを奪へるごとし。一家。某の百首
一冊を編まんとす。其首なる三宮のたちめる俤は。是
を以て一方まん屋の賦や号百首。守屋
乃連名言の意に意匠ゝく。既乃の理ゝ
よく展ずり。東弓の放筆一丁伯代の
伝奇を整て。彩色人を画すことを
賞し。白業乃巻は忠義の精神の嘉題を
仮り。古ドの前数は国子を従ふ女教
の名実全ふんとを大書まむ。唐和の

爾を裏散の無を思し。生月孔偶言
に龍雷まん表を立ゝ。江口の妓
孫を杜十娘を新して。伝奇の偶性をか
たり。孔第の戒と存する所。字伝夫序
津宮の我異ハ軍機の巧失顕ゝ。面
新の強ざる皆把浦天門。彼を九極。俤は
長徒ゝりといつとも。早従陸深名匠山川。古
老の伝吟。土人乃口碑。此ゝ忘んで世を少四
ゝ。是が演義ゝして。もさ日の無なゝ
倣ふ色し。実や学の為より出た寿なく

でと此事を書るわゞ。彼さるへなるき晴よ
月ゆかりよ魚の心よして。義奇の技業さへば
ちぎり多百野こ伝ふ紙ぞと言ふ。他者紙
能ひ多毛大文四の潮よ先ゞ自分を
らんうし。業よ里浪子ゝ紙の好あ
きば真ひゝくび接せられと可して。一
法を類する事。己ゞ分かゝざるの業あるゝ形。
吹れて酒の名十千閣主人撰

太逸
吾民

古今奇譚繁野話惣目録

第一篇

近路行者著
子里浪子正

雲魂雪情を告て太平紙誉ふ話

第二篇

母屋花孤生伐草葬ふ引話

第三篇
紀の関守が霊弓一丑白毛化る話
第四篇
中津川入道山伏塚を築しむる話
第五篇
白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話
第六篇
素卿宦人二児と唐紅を携る話
第七篇
重月三郎兼舎龍宮に流る話
第八篇
江口の遊女義経恨て珠玉を沈る話
第九篇
宇佐美三津宮遊紅を飾て歌を乗る話

以上九篇

古今奇談繁野話第一卷

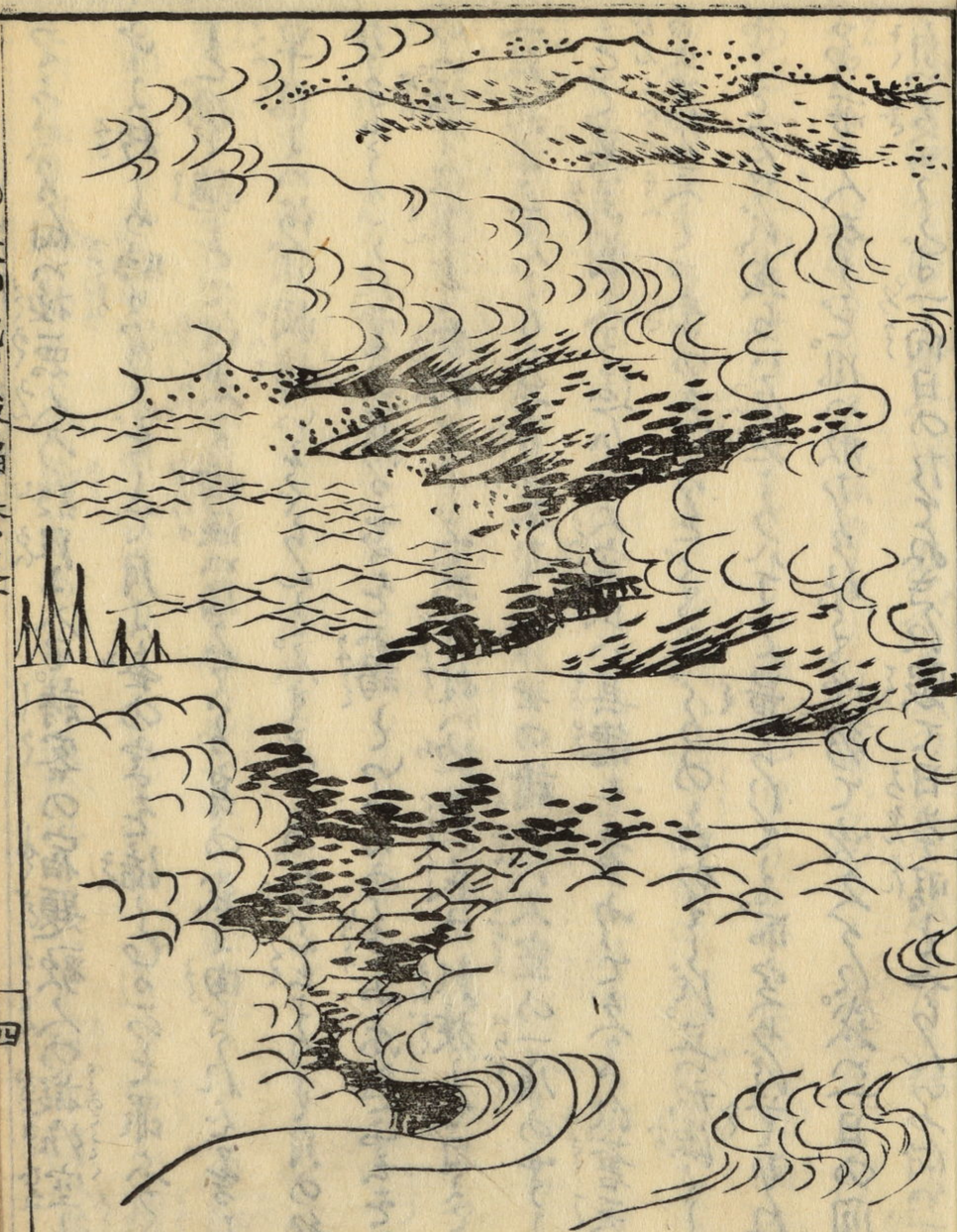
一雲竜雲情を語て久しきを誓ふ話

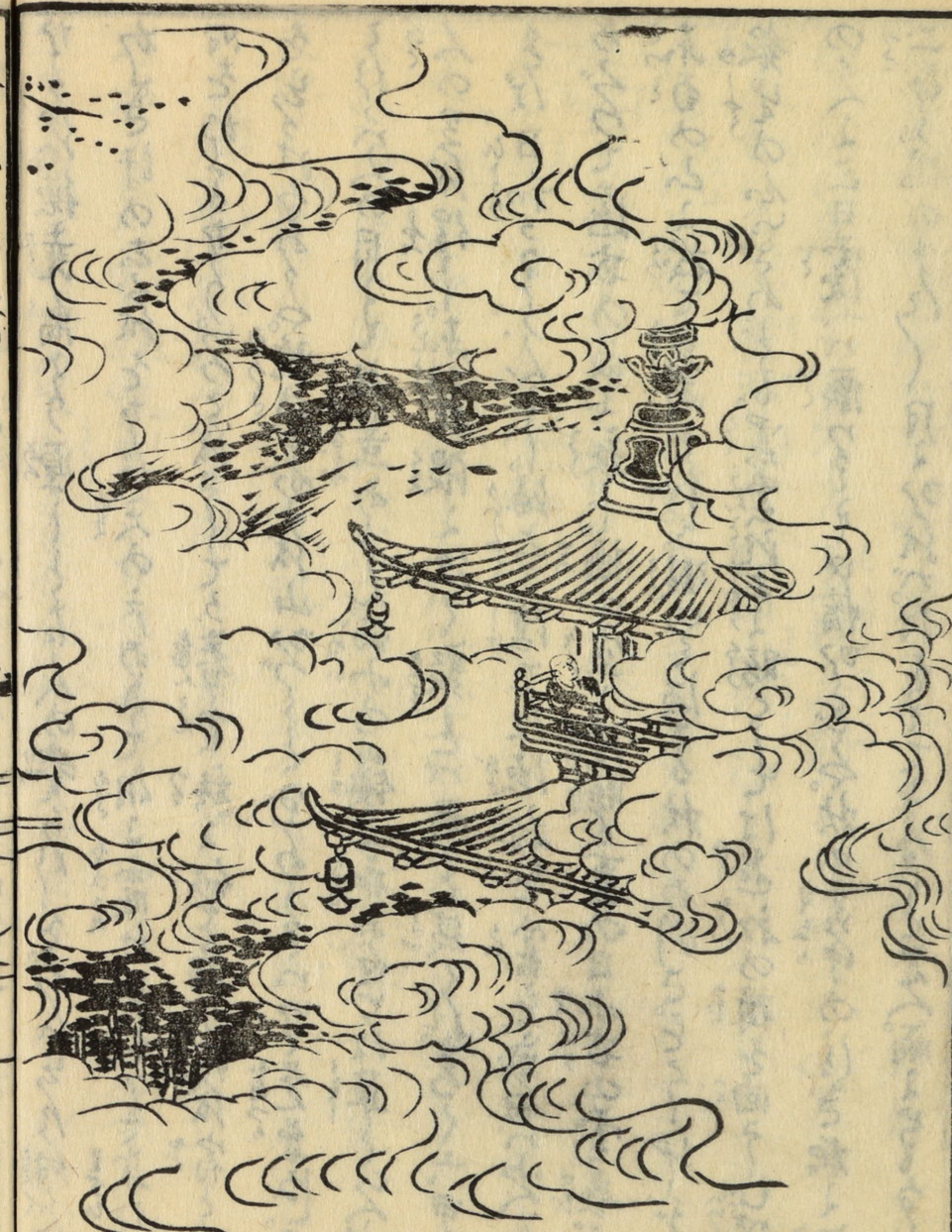
雲を體とし水を心とし。平生消しにくき情の心。世塵を忘れ桑門の身中。只恵をくくこゝにほしきまゝ紅塵の法蹟飛鉢の遺地。ゆゑにて精進の助もなさんとひとろ沙門。年比経ちし和尚の法紀を。よ嘉りくゆりしぐ。永の初乃春。行や旅と共に出て。状況を尋る朝こそ。少路よめ。ろ。ろ。を。く。を眺望して。富士の麓に過ぬなが。ぬ。ろ。ろ。門に登陸の志。ゆ。ぬ。ざ。ろ。し。ぐ。手段ある方に。何ゆゑ。ひゆりて。ゆ。ゆ。く。もかく。徒なる路の暁。皆に空。ひと。雲の。容。に。見ふ。新。く。ゆ。深。て。湖。多。雲。こ。花。を。生。く。夕。ある。雲。の。あ。た。ゆ。く。も。ゆ。ふ。は。ろ。け。き。此。寺。の。俗。俗。こ。和。音。あ。て。數。日。の。ゆ。を。休。め。一。夜。此。寺。の。浮。屠。の。五。層。こ。ゆ。も。て。仏。像。の。上。こ。ゆ。を。ゆ。に。恐。を。な。ゆ。ふ。も。あ。ゆ。ゆ。も。人。の。除。む。だ。さ

ゐの楼窓なくゐ隠べきゐの椽よてそと。秋涼の色衣讀誦ゐけるよ
かぞかりゐるゑれバ世とゑぞりくる心地し。雲路遥きうくゐがハへの心
ゐぞけやゑれハゐし。上弦の月中そくふ高ゑれど雨氣ありて恐ゑ雲朧
なり。秋月ふそこゑろとなくゑゑまそみふ。月のをむん高津の宮さへさ
だかならぬ。太ま無緒揚ひ眼を覚ゑ。塔の頂よ物ありて。法や係蓮張
陽の命と分ちてより。四方に位してくみひよ遠く望むぞかりてそ。南
よりハ直ふよ紀の雲路稀にかよりの雲路へまふて継がちなり。わきそ
北ハ海をよ住て。南よ出まゞハ海岸よ消され。紀を耐まれざり。ふれ
ち旋れ旋の風よ吹わぐされ。ば雲水の国あれよりて衆雲と共よ
一片づてもてされ停ことをぬぐり。世の中よ雲処なく生ゐありても逆
へざりしよ落雲村雲と示おくまるつ。今るものでざかしさよ。我を丹波
左郎と名よハ。少よ立寄除中うもかさみて見ゆるが中人ら。看て数生の楼
臺を組さて。變化定まり無ゆへ乾達馬塚もたとへて蜃楼よ濁せつ
ゑりも底の心ハ甚頼ありかし。たゞ高き風ふよとおりまき東西よるび
くとハかんせん。又去夜のそられ西氣を呼ぶる村雲。秋なりよしきを
飛ろる雲。さでハ吹るゐぞれる山烟などの。逆き風よ吹まぎされ
てかより西よ。南よりあへおくるハ我同姓よありされ。我さろそくへ遥よ
遠く吹風さへ同じかりし。それがしを奈良次郎とて。ハかよ立つ腰
幾らく寄除の體を知らうとせんども。腰かそられ中へ左郎よ及ぞ
ざるか。但なりし。び立てまぬの形にと我雲のもとぐさなり。や侍らまと
を泉の小次郎とよぶハ。南の楼臺遠くして人跡通ふよりかくりてる
ゆへかなり。名小海風よ障ら絶て立てと稀よ。奇峰のかたむひ獨歩
なるゆへ。世の人泉の小次郎が妻をも奈良次郎と集まてうとみ情
の身よいたくるべてかくるもゆへあるならご。方ハ同じ白峰姓なれども

遂に訣てかくるゝ時ありしが。故それがしと魔耶ぬしとも名付しハ、ちゝか
汝らの母背にあらずや。それより素性各別にて。後ハ六甲の左右にまさ
がりて背ハ左に魔耶多く部の山路にひそかり。東西なかく参遊きても
積めん浪花の人目にはまことがちにてあゆめん黒きとしてその名あるべし。
返照に薫ぜられて雲の色に含まる緑まで彩色のこずまも及ばぬ
色を設し時にこそ浪花人ハいでやらんと我をよいふめくしくなり。時
しも郭苑我まろ人を驚にておれバ。我六甲の古きを侍らし卑くあり
しれて彼を南海に出さしめ。我ハ山に拠てうごかず。在間三郎出るに至
に時さら重なれども雨師の小将なり。殊に進退ハ風雲によりて是され
ども。我軍の勝ハつゞくしても同じくて。却てハ人世の紛ぐる所なるらんか。さ
れバ。且ハ雲水のゑ我もかくさるのゝおのれしが学て我一言で
まぞもかくりてやめて成ぬをせん。実も云ハ妄てもよかるまんあハ我要

なりけれ。徳尭禹より厚しとて人の誉られしをいはひ出ん時くは笑
かまき汗の出ずるをなんぞ。天の戸あきて朝に霞は足をとゞめて我はの出の
時を知るなりけり。ゆゑて我さしてう春雲鶴に似て飛び往く旅宿らして岫
を出られぬあるや。暁のそがく我山かづらしるがあらそいれて竟(おぼつかな)じ。さるなど
これハ人の目にも好景あらん。西小の嶺に衣きせては単衣らんずとも行
人の足我湿し。東小れ濃に泳く驟いバ雨うと疑れし。古く六甲と号
まだ日和ならんとし。海上に泛ては漁利を害と。或時ハ少く東へ去れ
めぐりて遠方の方に感じ。攝の空に陰晴る。夏の日小方の雲展ざれバ
東南の山に拠て急雨を行る。瀬の流るゝ林のあはひさとくしぐりても
衆生の為いさめども。黒雲退上に晴くしては遊松の樽を回さし。いやるゝ
の人に三日露へバ一際りても口惜からずや。林の雲中の清き夜に一しき
こしらふ。風のまんく月にかゝれバ月をもてなすとてへ。雨にさらもあひて陰





ようさぐるは極悪人乃業報と入て。詩客の宿題歌人の擬作空しく腹中に朽しめ。晴るなるまぐれて月と雨の字を添しむるに歌ふくそ也。風と驅まとて往来に惜絶は腹をせくに身の我に由ざれば考らるき早風に吹紙帽障いそぐらんと。人もえとも。紙雲ようも月の紙ゆ。なるもうさに雲の集るを雷と謂て。日の色ふ赤きを霞と謂て。俗は混じて分別なし。我素姓は地黄氏の族にて。月にそそ一称地上にて人より我名を不知。世の諸人は大空の一属のゆうよりぶるまぐど。其系圖大に遠ひて。大空氏は其徳を学ひて久々に蒼天昊天旻天上天と四季の名かまぐども。みどりの色かまぐ。其秋深くして浪ことをえせず。我らは地より八千と量られども。所定めぐ定なれば。雨の亟さ人をまぐど。風は形なれども吹紙て吹ゑ。我は一日の間ふ消負定まらず。一向日のたそぬきに照て日夢晴とやらんは一時に

る海の紙を浮て長若界に赴で。古人の雲を賦したる詩に。その日は雲をみし。夏の日は暑紙かんとて。露ぐりし我とあげ。ぬ如紙。我造物乃世の助ともなるは雨而已なり。是も其土地雨多に数ぐ多用いてざれど紙てあさぐんど。武は他方の面のみふ紙雲をそそ。方の天多紙ト人は雲情紙取遠ること多し。時ありて水とみふ。海湖水の分ちなけまぐど。地氣を去ては我雲中の秘事なり。況ふ泛て起る眞龍即ち風雲の乾属なれば。雲なれ紙みる面と奇水と名づく。多く是遠方の龍雨なり。又春の霑氣乃空に落さ。ぐ夏に向て落け降る。冬に後は星てさぐ紙雲となりて。ん雲蓊蓊しきといんせんゆるやるる府は紫のごく紙のごくるの距のゆくさめうるあり。只虫下の人は見なし雲とそれども。遠き空を横ぎりて紙ふ在一法く其脚をあらん。飛は風みぬ。獨れ清人聚て数

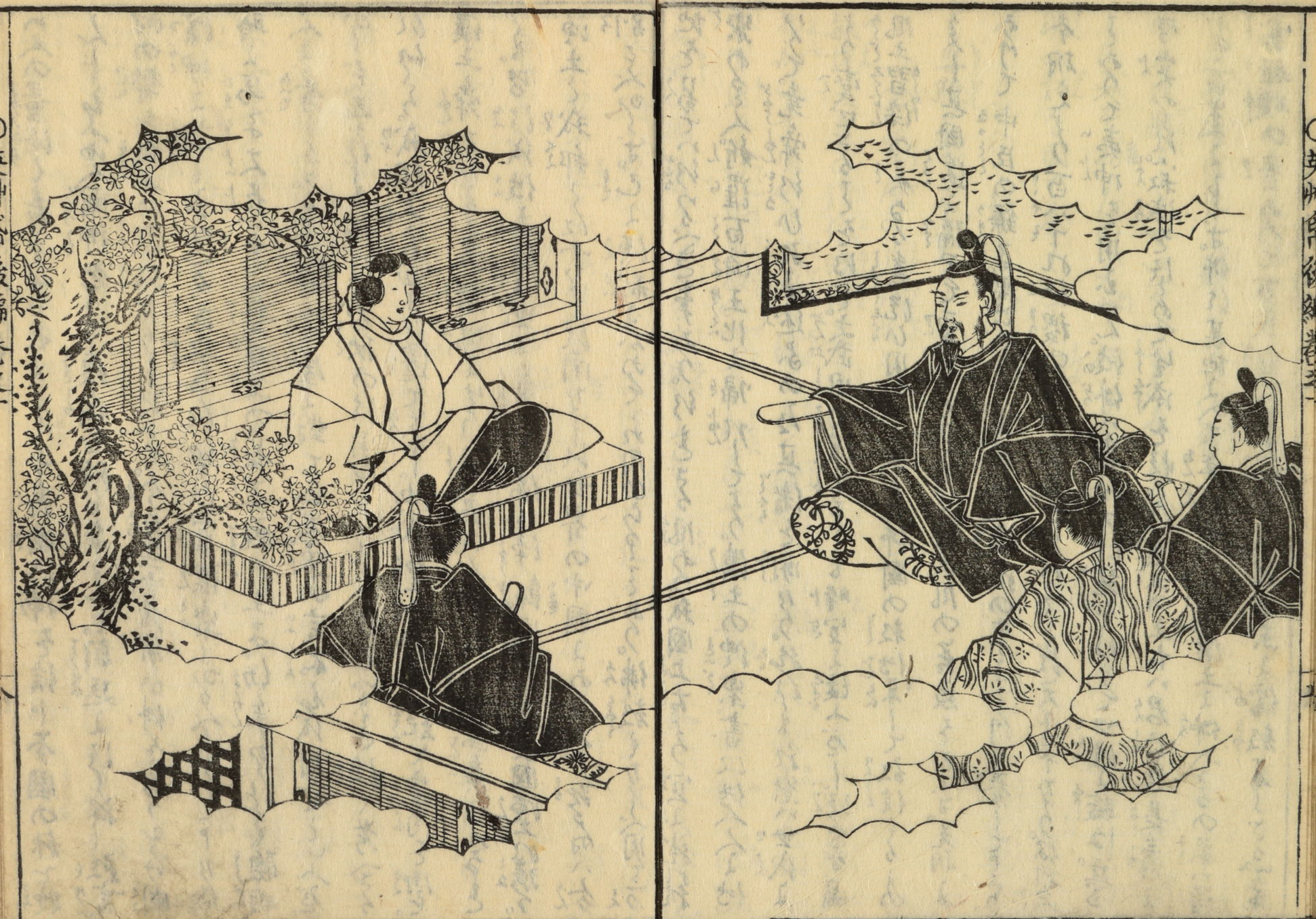
ふるしい陰陽の布ふはなり。風の力云乃界とある所い吹のこされそ長く
一疋の練とし。又織物のごとく廣く水はさの文となるは風のゆえに
なるとなり。霰をあられ雪氏ちりしていぶのとがこれ風中とえせ
む。左と旋て絹の白ひくかくらるなり。天氣のたなりあるさの雲ゆく
紅ちるさの雲を掃い風うるとんとして其あつぐんめぐるなり。よるの雲
東に紅下なる雲西とむとは風上下にめぐり聊雨氣の動くなり。空
ろ吹なくに風は其地勢とよりて吹もどるとあり。流氣の動なるなぞ
谷風吹て出紅を送り。暁ふ春風ふ帆をのびしむ。天然の大津矣と編
凌の振地なるなり。風の勢は四方の山形と因りゆ全地と通て異なり。
唐土の書と名称多しとなれども方角と四時ふ合せられぬ邦と用
ひるとおもの風を黄雀風としるも時と月とあるとなるべくなる
ぐ。本朝まとの名称多なれども正しかるべし。若ろ統の風とある

とるいは風吹ぞ及ぶし。水氣すでも吹ることふるこの風ともらるよう。
小國風とゆ吹あその横ぎろるる遠く来りてもはるし。真風を西
南の山なさ向ろ海も吹なくぞ来ぞ一字ふ吹送る其ものさ清ろよ
涼し。風雲の紋は四方ろもて表正なるぞ斜がちふ隈うけて吹ゆ山風
は婦なろ。四方ろ吹風紋隈風と名ぶけ吹ろ紋雲のかさんおぐゆ
うなるぞ。実や雲雨風煙は西もろ表れぞ風ろくむるちる雲れ形
塊かを表ぐんとて絹ふ白粉を落してぶて吹ろるまれ形とるる
を吹雲とゆぐけ。細とぐんと欲ぞ羅章の伝と名と合ることい
西の雲れ登蹄とるとは雲翁ろ人世と伝へるるし。我なるがるく
ることるるとを人とぞのこうろ。今ちて事業の雲者を吐て
何ふかるる雲るし。百とセの後つるさを平長と時紙ぶく。祥雲潤
氣充ふたる引立て福利海と満ちぬ人文林をなし。浪なき東風恵

ふう。我らぎ〻に浮雲も袖をひるがへし。第一四方に立ちいでたへど奇峰秀出し。静かなる世の観にそなる人願時と云ふことをみるとと寿のあれ御こゝろ〻て四方ふるまと去まう。沙門者さわて云へ雲れの主〻と我を拂ふ。めぐて此〻妙なる服刻の荘厳なるべし。殊しくも雲魂の詩を国て人もかう同てい漢の四方に連る雲の。昔より各其名あることを物て行くまれたもあと美ふ白雲と共び空なる安言。聽人も安聽云ふん。冤ふも角にもそそる

(二) 宇屋の住殘生を草莽に引話

敏達天皇の御代疫疾大に流行し。蒼生を害ることなるのぐ。時物部の守屋の臣大連の職に在て諫行まと言聽と。大に感ふあり。国く言を進めて曰。凡善教の世界に行るやい国の善政へ其国に往き彼国の君教に国に来るい。貨を交易をるぐ〻。互ふれ用いて恥ふしくとと。地を易ていれるべき事あり。行まざる風あり。我国上古より宜に従れ祝楽あるべ。新羅百濟王化に帰服てより。漢土の俳楽書に伝人人に伝りて。堯舜行ひれる述ふのを其備を用ひる。彼れも礼楽に世代み風土習俗の異多差ひ用ぐ〻。近年仏国の教傳来して敬信るるみ多し。其国遥に隔て西夷にあり。ぐまぐ其土風の若亟をたぐ。先祖よりて中臣の鎌子。愚文なる尾輿等。疫疾の事よりて奏して云ふ。本朝文より百八十れ社稷の神ありて祭るれ〻〻天下平なり。仏神に〻〻てあり夷神を用ふん。彼仏い夷狄の法なり施をぬ〻て世法に驗ふ。其国に変あ〻ば。叔滅をたとめて生成を祝ぐ〻。漢土の上古は君臣皆長寿にして百年に〻ず。仏は其地に入て夷代むも保る。漢土に仏入ざるの前は海書雅頌の音あって万民自ら多福なり。我日東に儒教まざるの前



人の量浅く寿のみさもうし。今夷國の神を信じ本國の神を忘れんじ。もし人國神怒りて疫疾と祟をなさんと。朝廷より祈禱の勅言。時の弊を救ふの激論なりしいへども。今日其言を用ひ仏をうつぞけ國津神に謝しむべし。人民安きをむしろ宸襟楽しめるべしとぞ。時に馬子大臣。豊日王の長子厩戸王子。幼年なれども聰明人に秀でたるを。もてんで守屋に對て云。大連の言而も我用ゐ難しいふ。ものどもたれども仏は夷狄の法用ゐべからずといまだ深く考へざるに似たり。我邦上古西より遷て東し。神武皇西鄙より起て宇内を併せ。漢土舜王なるの諸馮よりも東夷の人。文王は岐周西夷の人なりと。時に彼土は後世に乗ず。仏は浄飯國王の子。其國漢土に流る。漢土と我邦とは小なれども南なれば世界の中國にあり。大に知るべし。今別にべし。已に漢土に流れ来りしかの仏教もなほ用ひらるるにあり。仏教もなほ用ひらるるにあり。

民を利し人べきなり。又仏は変化なるなんや。凡聖を法を の其教ふ達せざる所の其変化とあるべし。仏は其富貴を捨て身をもて忠孝飢寒を免まんがあるもあり。仏の国ふるうて空妄不実の事を説く。世のれまて不実のみをなせば。年月を経て衆人悪て是を棄ん。何ぞ漢土我國の今日のごとしや。其名を知ざるんや。其名を知ざるに教まぐる。仏の妄を證とべきなるしるしなり。天神鬼神を傾くるにてもんで妄なる而。其人ありて虚実れ體をもんで世の人我に実なる徳の意あるを大智にあるべし。ものよりあるべし。其憎愛を捨て取捨せば。後世必ず互に相排斥して勢二つかるべし立どもるべし。儒家と女人とを品せば儒生を卷べし。儒生史と記せば儒家と仏家は儒生を卷べし。儒生は儒人を引ども互に温柔の和を失うん。又仏教入て命教を侵といふと

思淳の説とそ己か書の無逸と言ひどや。時より顧後亦及壽きこと有りとなし。武八十年武八七八年武五六年として文あり。彼時は漢土まゝ佛の名をも聞ざるのみにて絶つ。佛徒の中にて壽ありとのあるをや。漢土ハ佛語入りて後ハ言語繁雑ゆゑ頌誦変ずるもあんべし。其國に通ずるハ音接ず語雑ゆゑ自然みて免ざるをかなり。佛語入りて万民後なりしとハ後なるのみをかゝさあるべしと。早く明るゝ花ハ早く謝し。栄をなしゆゑ衰をなるしみ。践祿多くして血脉續ぬあれハ。眷属ゆ富て養ゆゑ足あり。煙を分つ家多きは身ふにくをてあさいなるの後なり。世人見てを知ゝゞ貧ゆゑ知りて如何思ふあゝどんび利益ゆあゝどとなるゝ。王者の民ハ森の如くして惠のうらに生活を。佛のみなる不其域ゆ近かゞん。大連熟再思と加へ給ハ今法王聖教既ゆ来るとハゝ。こ偉の佛人ゆして親切なゝざる成情む。丸き直ゆ漢土ゆ使者を遣し。面接口伝して我國を利せんとおもてゝ考ゆや法ど。大連の高明ゆゝ比ありとゝ。大連ゆゝも温和なく從容ゆゝ答て。聰明の論ゆゝ不世の惑を明ゆゝ仏陀佛陀ゆ為つて詳ゆゝ論ずるに及ど。良ゝ異見ハ以知廣まり文華ゆゝ賞て賢朴の國風を失ハゝ成ゆゝ。王子大臣ゆゝ高ゆゝ明ゆゝ比ゆゝ。帝ゆゝ稟ハ及ずとゝ。帝ゆゝ元ゆゝ佛を好まず守屋ゆ一言と聚べきとゝて。佛教を停め佛像を流し。僧法を禁ずゝ。されゝも疫病ゆゝくさんなれべ。佛を流を崇ゆゝ為ゆゝ人多ゆゝ豊日王嗣て立ゆゝ用明帝なり。既ゆ戸皇子時をゆて威名あり。守屋のゆゝ權勢稍移ゆゝ。用明崩ゆて守屋ゆ穴穂部皇子を位立と計る。穴穂部皇子威勢を新て情まず。炊屋姫を殯宮ゆ見ん

として七さびに成ぬ。馬子遂に内命を含で
宮殿を焚し。諸皇子と群臣に謀て守屋が河内の家を圍む。守屋春
屬家人と率て稲城を築て戦ひ。三廻敵軍を却還しむ。廐戸王子後
軍に加りて戦を力む。守屋が軍此に利あらず。一族従者悉く裏の石ふる。
其身も矢に中り終に動作自任なりがたし。合軍に告て速に進まて分と
脱るべし。我いまし命とて多くの子孫の巨坂に隱て守屋が
服を纒て死に代らんともひ。家小坂と人を謀て服れ入む。守屋が
軍と同じく皂衣に服を換へ馳猟なるよし偽て城を離れ廣
瀬の内にいたりて是よりかの子孫の数多。守屋主従只武人
登八葦原に分れ伏し。夜に乙を紛て伊勢路をめぐりて海に入
る。我楽地に事ありなれそ。百姓の邑の長にたりて彼が宅の後
に山乃岩窟ふひそみ隱れ。創を養ひ全きことを待て代の後

是紛さ成ともなんと命を存へ。ひそ山れ嘯みして人れ通ひ者る
路もなく。萩のしまさらうる中に庵りむとびて高名を草葉に
埋む。世人是を知のなし。是ぞ隱中れ隱者。自ら萩生翁と称し此
所に老矣を朝とぃつしらよみう拙古帝よりうりて。廐戸皇子の嗣の
たるとうて政を扶ひ。仏法時代に切て興り。大利を建立し信仏を
成就と。仕を唐に学し。隋唐の式に従て冠服を制し位階を定り禮を
肇え楽を正し。國に疫疫なく五穀豊熟し。海内の治安永代と称る。
小板屋里に出て世の動作を学て時の嵯峨一さ
びい表で玄廐戸政を関て君安く民和楽やは我に為めて他議に
依出て遠く新に新に民間に立て実に民人の澤を被るや仏教を
て國安きの。霊験にて我に学メせよ。しかの坂憔悴せる形に弊垢づく
衣と仕ぬ。乞食にて大れれ新に紅に仏ぐらるる

に宮に祀られ片岡なるあるやうにかりそめにも世に興幸ふ
去て經營をなるがあるなる微行して赤とかりんしは不仕ることを哀と
思ひたんに顧て彼が衣食代得人べしと命じ從つる宮人飢人の
傍に来て曰て云。飢人上の恵と云へ。拾改て衣食代得人院に村の
老に命ぜり。今もなべしとて。飢人張て起ぜして云。後者飢て目力
賀く抗よりてなどいまゞ拾あるの食代をつずしてけつ仕かうど。
今得がごとき恵なりなど。大公目茶一人の飢宴をなして衣食代得。
天下の飢人いくばくありとも。くくを仕に衣食を給べし代得べ
きや。是近きに親しく遠き疎く。公をと久まりあるどや。宮人不興
して言へどもなにいちはりあるて其概をしたなる奇特のことにおそて
作用をトしまいて。飢人ゆけ。其ことを代先ことをるい人情の常く。
況や執政一人のみい億万人のひなるをや。我に近き飢人と恵ひ心
ゆとべ遠き國の民又甚なるらんや。飢人地に孤して畏き伏をな
る宮に投らせまひて。実やは飢人飢人れ為のものあるどいを飢に
繋まんて傷べしとなるに哀ど
なるでなるや片岡山に飢に飢て死せる其人哀をや成
人をとてをなるめて。邑長をそて衣食代あるて人て飢人をうん
つまるるがごとく。宮人去るの傷嘆をめうて仁徳を施を。飢人世に有
ごき代をを友人に對してかくとなるん
するや民の小川はたへどうを我大君のみそないとれで
使傷て此ように啓をされどうそ異人かうとをわて人をうて飢人を
ろるるて。使ものは絶る衣と其地とをめて其人い新るなるしてやとも
小坂は出るの顕まんてを代を其布をのがうう。境をたどをて通
逢ひるに歩をたれりたどを四の新るる中に立をてをれ傷に恢

と申さう。後なく所の雑仕をする人まう。彼人の教をかぞへて食
をあらんと申さる樂人とうそ衣とあらん人仏道に起をんべをたぐの具と
なさせん。公安うなりと云て去る。流石丐面く相対し語て云。爲れ日
掠政王片岡みて飢人を恵こと諸有司こゝろ〳〵ゆつて
て大饗の粮を減じて今日より粥を沙汰せらるゝ者多さ
よとのる。小坂是より遠く沈海に陸ちる。羅に対してたゝみの仁恵とう
る。爲歌表して云。掠政王仁の國を治し恵を広く及ぶ。民永く
仰とこけん。我好びたまん加るこれ。我今日國の会式なると
其後い敢て世上のるを問ず。後庶戸王薨ぜるゝゆて傷ら悔て
止ど。ゆを往て里民と付果し。終に教て水放ち土を穿き利益
をるを少かゝ。居人里に出ゐんをもひ。山中老境に
庶ぜりと。世と苦し百果の長寿と保ち。皇極の朝に至て歳戸の

河る山背王入鹿ゐ亡さ社其嗣を絶てゆて殺じて云。世人のこの上
しているをひるの。教雲早く散じ冥界りるきふゝ故云
世比世の人見るふ説あり。古る須じめ墓地をゐゝみ。其あ旁の地脉
を断て收ざしめる孫あゝせどゝ恵て朝せゝ。志願なるゝ。爲
聴て笑て云。葬地の吉凶ようて子孫れ盛衰を論ぐるへ。惑れ
弊風水家れ説みて人を惑をゝと其害大なり。我國其事の行ざる
とんて一つのをゝんゐれば墓を築る身ゝて。其墓を守るべきこと
孫の祢を祭ゐや。是古る仏を信じ世ふ功ありて其る孫續ざると。仏
法後かゝと愚人の疑ゐこと成恐と。傍家は説を妄作流言して其
るを掩んとるるあゝん。家運は大教の定る所。夏殷周の三代
も時あるいて尽ぬ。鹿今勢とゆるるも豈久ゝんやとゝ。果しく
往るく馬ゐこ代の聚葬。入鹿ゐ。もつて孫遠あるとゝ。爲世れ変

易とこつく〜。時代遥か後まで。今は保存ありて里人と岩
て云。我い先祖の大連お部守屋の住。世代のゞれけ地と生成りて今ハ
くゝる。我を此地と祭ゝば。国と水旱の憂なく。安寧永久なること湖水の
尽ざるがごとくなるべゝと。遺託ありて逝去後小祠を建て萩原
神と祀たり。系記おこゝゝに。大連の匿くる巖窟も。今と依然として
遺りゝとかゝり住人くるとゝ称る

方正道人廃戸王寺屋の址と祖師をる詩あり

雪裡柵條順克柔　石梁度人斷時休
臨史何取口碑實　紅白就分萩與萩